

回ることにした。

祖父母や親に連れられた子ども7、8人を含めて25人を2班に分けて実施。各班の大人1人と子ども2人が拍子木を持ち一定の間隔で合わせて叩くよう求めた。

だが、子どもたちは思い思いに叩くので音が揃わない。

2日目に地域の人からの「ご苦労さま」の声かけに、ようやく3人の拍子木が「カチ！カチ！」と揃って団地にこだました。足取りが軽くなり、ワンチームの夜回りになった。

〔花時計〕2021年1月

\* 例年の夜回りは子どもたちの「火の用心！」「サンマ焼いても家焼くな！」のかけ声のリードで団地2コースを歩く。

初めのうちは躊躇ちゅうちよしていた子どもが、気分が良くなってハンドマイクを手放さないこともあった。かけ声の後、拍子木を打つ、一呼吸あつて子どもと大人が復唱する声がコース後半になるにつれて大きくなる。

それが、今年は大声が出せない。参加者が少なくなるのはやむをえない。

そんな中、音が合った拍子木のリズムに引っ張られるように足取りが軽くなった。

## 第IV部

# 「エノケンみたいや」



落合っ子フェスタ

## 取材と記事

春先に軽度の心臓病と診断されたので、人工心臓、再生医療について考える市民公開講座に参加した。

満席の会場に座ると、すぐ前にノートとカメラを手にした女性記者がいた。5人の講演のメモを取りながら、立ったり座ったりして写真も撮った。開会前には主催の神戸国際医療交流財団理事長に、休憩時間には講演を終えた日本臓器移植ネットワーク理事などにインタビューしていた。ストロボはほとんど使わず、使ったのは1、2枚だった。

翌日朝刊の神戸面を開くと、記事と写真が目飛び込んできた。取材は毎日新聞だったと初めてわかった。

心臓移植までのつなぎとして人工心臓を体内に埋め込む医療技術の進歩と、取材を正確にわかりやすく、しかもすばやく記事にまとめる記者の能力の高さを再認識した。(2014年7月)

## 床発電

8月23日の夜に、妻と兵庫区のノエビアスタジアムに初めて出かけた。地元ヴィッセル神戸を応援するため、対戦相手はベガルタ仙台。鳴り物を鳴らし旗を振り激しく飛び跳ねるサポーターの応援合戦は、両者負けず劣らずだった。

ハーフタイムに大型ビジョンに「床発電システム本日前半戦の発電量」という表示が出た。「床発電って、まさかジャンプ振動による発電ということ？」と妻が尋ねた。調べると、そのまさかだった。サポーターズシートの一部の床に発電パネルを貼って、ジャンプ振動を電気エネルギーに変換する新しい取り組みだった。発電した電気は、試合終了後に場外で誘導灯として活用している。その発想と技術開発に驚き、環境問題への関心を高め節電を促す意義も大きいと思った。(2014年8月)

\* サッカーサポーターの熱いジャンプ応援を生かして振動により電気が生み出される。サッカー観戦ならではのヴィッセル神戸の特色を生かした新しい試み。ホームズ(現ノエビア)スタジアム神戸で2010年にJリーグ初の取り組み「床発電システム」を導入した。

## 落花生

秋の庭先、義母がゴザを敷いて収穫した実の天日干しをしていた。「おばあちゃん、それ何」。息子が不思議そうに尋ねた。義母は「まあ、見とき」と答えた。



ノエビアスタジアム神戸

数日乾燥させた後、鞘を切り離し中の実を取り出した。見覚えのある実に息子の顔がほころび、目を輝かせて「ピーナッツや」と叫んだ。

息子は煎餅と落花生が混ざったお菓子から落花生だけをつまんで食べる。「それくらいでやめとき」。食べ過ぎを制する妻の声を幾度も聞いた。

「落花生は枝豆のように地上の葉っぱに実がつくのでなく、土の中で実が育つ」との義父の説明に、息子は見たことのない真剣なまなざしだった。27年前、息子が小学4年生の時のことだ。

(2015年1月)

\* 義父は、米や麦づくりのかたわら、苺、葡萄、キウイ、八朔、甘夏、椎茸と次々に栽培し、食べた孫たちの笑顔を至上の喜びにしていた。

とりわけ、炒って香ばしい色になるとバターを加えて艶を出し、最後に塩味をきかせた落花生の美味しさは今も忘れられない。

## 朝ドラ

「今朝、うちの主人が朝ドラを見て涙を流していた。まるで鬼の目に涙」と、ボランティア先で、夫人が彼女の夫のことを笑った。

出征する息子へのはなむけの言葉を促されて、父親が再会の歌「オールド・ラング・サイン」を歌う場面、そして父親が息子に「卑怯者と言われても生きて帰ってこい」と言う場面を見て

のことだ。

「実は私も妻にわからないように涙をぬぐった」とご主人を弁護した。

すると、女性たちが「男のほうが女よりロマンチストということね」と笑った。

そうかどうかはともかく、歳を重ねて涙もろくなったことに加えて、俳優の好演に苦難の時代を生き抜いた父親の姿が重なったからだ。

(2015年3月)

## 告白

友人と六甲山を中心に山歩きを始めてほぼ40年になる。この日は、三宮、布引、市ヶ原、大龍寺を経て大師道を南へ下るコースだ。話題が血圧、血糖値、コレステロール、薬のことに始まり、昔の体形のことになった。

山歩きを教えてくれた彼は、私より2歳若く中肉、中背、筋肉質でスリムだった。そんな彼が「胸囲は最高で98センチあった」と明かした。

「えっ、ほんまにそんなにあったのか」と思わず聞き返した。

とてもそんなにあるとは思わなかった。

バーベルで筋トレをし、結婚後も幼いわが子を背負って山歩きをしていたことは知っていたが、とてもそんな体だったとは知らなかった。

40年来の友人の衝撃の告白だった。

(2015年5月)

## 笹団子

県内に住む妹が今年も笹団子と三角ちまきを新潟から取り寄せてくれた。昨年私が「30年ぶりに食べた。笹の香りが懐かしい」と大喜びしたからだ。

餡入りのヨモギ団子を笹の葉で俵型に包んだのが笹団子で、もち米を笹の葉で三角に巻いて蒸したものがちまきだ。新潟の祖母は手づくりの笹団子とちまきを毎年送ってくれた。母から「手作りが難しくなつてからも買って届けてくれた」と聞いた。

「笹団子、ちまきのどちらが好きか」との祖母の問いに「笹団子」と答えて、まず笹団子、次に甘いきなこをまぶしたちまきを食べた。今も口にする順序は変わらない。

逝つて20年になる祖母と17年になる母の顔が浮かんだ。〔花時計〕2015年7月

\* 百歳を越える長寿だった祖母は、晩年まで毎年私たち孫に笹団子と三角ちまきを送ってくれた。大喜びする私たちを見て、新潟出身の母も嬉しそうだった。

## 月曜の朝

友人に誘われ4人で泊りがけで出かけた京都での2日目、月曜朝のこと。

御所西のホテルから北野天満宮、西陣織会館、清明神社をめざして寺町通りを北へ歩をとる。

マンションや戸建て住宅も京都ならではの風情を感じる。

それが大通りに出ると街の喧騒けんそうに巻き込まれ、空気が一変した。

休み明けの通勤、通学者のバスや車があわただしく往来する。狭い歩道の後方からは自転車の呼び鈴が鳴る。そのたびに幾度も体を端に寄せ道を空ける。

そのうちに取り残されたような気がして、言いようのない寂しさを感じた。(2015年7月)

\* 仕事を離れて3年以上経ち、勤務時の月曜朝には「今日からまた仕事か」と気が重くなることもあったのに。京都ならではの風情ある街で月曜朝の喧噪の街なかに立つて、こんな気持ちになつたのは初めてだった。

## ルワンダ料理

妻と県立美術館の「船越桂展」を見に出かけて、同館西側のJICA関西でアフリカのルワンダ料理を初めて食べた。

昨年12月の毎日新聞「ほつと兵庫」に、この食堂では月替わりで各国のエスニック料理が食べられると紹介されていたからだ。7月はルワンダ料理だった。

サツマイモ、鶏肉のトマト煮とトマト、タマネギの黒豆煮、生野菜のトマトケチャップ和えに加えて、トウモロコシ粉で作られた主食の「ウガリ」とライス、さらにバナナをトマトピーナツで和えたデザートとコーヒールがつく。料理はトマトたっぷりでもおいしかった。ま

た、食べることで開発途上国の給食1食分20円が寄付され国際協力することになるといふ。その意味でも大満足のランチだった。

〔花時計〕2015年8月

## 同窓会

大学同窓会に一昨年秋に初めて出席した。45年ぶりに顔を合わせた同級生は、ゼミが異なると共に女性はさっぱり思い出せない。

そのうちの1人が「今、父親がかかわっていた老人クラブ運営を引き継ぎ、クラブで西洋史を教えている」と近況を報告した。その場で彼女に「60歳以上が4割を超えた団地の老人クラブ立ち上げを考えている」と伝えた。

先日、彼女がメールアドレスを変えたと知らせてきた。同窓会后、連絡もとらずにいたのに気にかけてくれたと、今年2月結成のクラブの活動状況を報告した。すると「設立おめでとう。課題や困難を乗り越えてください」と激励のメールが届いた。

今後、老人クラブ運営にアドバイスがもらえると心強く思っている。 (2015年10月)

## 神戸の映画

「神戸映画・大探索」というタイトルに惹かれて長田区の神戸映画資料館へ初めて出かけた。

1921年の川崎・三菱大争議の記録映画を素材にした「灯をともした人々」は神戸駅前、大

開通、新開地本通などを行進する労働者を描く。

高峰秀子、池部良らが出演する五所平之助監督の「朝の波紋」(1952年)は東京が主な舞台だが、神戸の海岸通、北野、諏訪山展望台なども映る。

「セピアタウン」(1984年)は芦屋出身で当時大学生だった白羽弥仁氏の初監督作品で、ロケ地は神戸、芦屋、西宮など。3作品それぞれの時代の神戸の風景に懐かしい気持ちになった。最近、映画鑑賞はもっぱらレンタルやネットだが、たまには映画好きが集う38席のミニシアターで楽しむのもいいものだ。

〔花時計〕2016年3月

## 若葉

朝刊に目を通しながら聴いていたラジオの曲に懐かしさがこみあげてきて、無意識のうちに歌詞が口について出てきた。

何十年ぶりに耳にした曲は唱歌「若葉」だ。わが家の若葉は、団地専用庭隅の柿の木である。30年以上前に妻が富有柿の苗を植えて「桃栗3年、柿8年」と成長を待ったが、いっこうに大きくならない。

それが、隣人のアドバイスで土壤改良して以降、毎年実をつけるようになった。3月下旬に新芽が出て、今の時期は若葉が枝を覆いつくして目を楽しませてくれる。

新緑の柿の木をながめっていると、「若葉」の歌詞にある鳥居、わら屋、田畑、野山のある田舎で暮らした幼いころの記憶がよみがえってきた。

〔花時計〕2016年6月

## 市川雷蔵

毎日新聞連載「馬場正男と撮影所京都カッドウ屋60年」で市川雷蔵についての話が続いている。「忍びの者」「眠狂四郎」「若親分」などのシリーズに主演した市川雷蔵はクールな役柄が格好良い。

これらの作品だけで雷蔵を知ったつもりでいた。それが、この連載で、頭を丸め酒も断って現代劇初出演を決めた雷蔵が、後に「忘れられない」と回想した作品の存在を知った。市川崑監督の「炎上」（1958年）だ。金閣寺放火事件を題材にした三島由紀夫の小説を映画化したこの作品をじっくりと鑑賞した。

吃音で劣等感にさいなまされ、老師への不信や母との確執に苦悶し、この世で最も美しいと思う寺に放火する青年僧という役柄だ。少ないセリフで内面心理を表現する演技が光る。

37歳の若さで亡くなったことが、今更ながら惜しまれる。（「花時計」2016年7月）

## 甥の声

自宅で昼食後にテレビを見ながら、うとうととしていた時のこと。

電話が鳴ってあわてて受話器を取ると、相手は「Aです」と名乗った。

Aという姓の知人にしては声が若い。電話の主が誰かわからないままで、気まずい沈黙が数

秒間続いた。

「失礼ですが、どちらのAさんですか？」と尋ねた。すると相手は「〇〇のAです」と、姓と名を名乗った。やっとわかった。妹の長男だ。「A君やな」と言う、「そうです。ご無沙汰しています」と答えた。

「Aという苗字の人かと思って誰かわからなかった。とんちんかんなことを言っでごめんな。気を悪くせんといてな」と詫びた。

この日改めて加齢を実感した。（2016年7月）

\* 昼食後に妻が外出して、ひとりで自宅にいた時のこと。彼は私の長男と同一年で、県内に住んでいることもあって、年に2、3回は会っている。そんな彼の声から分らず、他人行儀な声をかけるとは。

## 妻の実家

10年前に妻の母が亡くなり住人がいなくなった実家を妻と久しぶりに訪ねた。

妻の兄が毎年、庭師に手入れを依頼しているため、築山、庭石、池に樹木を配した庭には金柑が実をつけていた。

できることをしておこうと思い立ち、石灯笼の脇の石臼に溜まった赤茶けた雨水をひしゃくでかきだした。庭の南の畑地で義父が育てていたぶどう棚は撤去され、キウイ棚が残るだけに

なった。

居間に飾った家族の集合写真を見て「何年前かな。お父さんもお母さんもこんなに若い」と妻に声をかけた。

妻はしばらくながめていたが無言だった。庭の片隅には義母が好きだったチューリップが咲いていた。

帰り際に、妻は一輪を持ち帰り、わが家の居間の一輪挿しに飾った。(2016年9月)

\* 毎年、家族と親戚が集まって賑やかな声が絶えなかった妻の実家は、家の中、庭、畑のどこからも声が聞こえない。

誕生以来結婚するまで暮らしてきた妻は、口にこそしなかったが寂しかったに違いない。

## 集中豪雨浸水

台風による水害被害報道を見るにつけ、秋雨前線のいたずらによる2度の自宅浸水体験を思い出す。

最初は大学通学時、帰路の電車が市川の増水で御着駅でストップ。

姫路駅西の自宅まで約5<sup>キロ</sup>を徒歩で進むと、周辺道路は膝あたりまで冠水し、わが家では父母が1階の畳を上げ終えていた。

2度目は結婚翌年の9月の夜明け前、近所から聞こえる大声で目覚めて窓を開けると自宅前の道路は川のように「雨戸」や「植木鉢」が勢よく流れていた。

妻は1階玄関にぶかぶか浮く靴を見て、自宅が浸水していることがわかったようだった。9時ごろに雨が激しさを増し、浸水した玄関土間は表面張力で水面の真ん中が高くなり、アルミサッシ扉は水圧でゆがんで今にも壊れそうになった。

この時ばかりは「これ以上降らん」とひたすら祈った。床板まで1、2<sup>センチ</sup>まで水が迫ったが、そのかいがあつてか、かろうじて床下浸水ですんだ。(2016年9月)

## 同級生

4年ぶりの高校同窓会で女性が「私、わかる」と旧姓を名乗る。前回の同窓会で、中学校同窓会に際して私と連絡がとれないと教えてくれた彼女だ。

姫路から神戸に転居したので、そうならしい。小、中学、高校と同じ学校だった彼女が小学1年から中学3年までの担任教師の名前を聞く。各先生の思い出を話していて「4年生の先生の弟さんの仲人したのは私の父母」と返すと、「えっ、そうなん」と話題が広がる。「当時の同級生に会いたい」と頼むと、彼女が「おしゃべりができればええね」と住所と電話番号、メールアドレスを教えてくださいました。

55年ぶりに同級生に会うのが楽しみだ。亡き父母がかかわる話も聞けるかもしれない。

〔花時計〕2016年10月

## 藤原ていさん

作家の藤原ていさんが亡くなった。

敗戦後、3人の幼子を命がけで守りながら満州（現中国東北部）から帰国したていさんの講演を30年ほど前、豊岡で聞いた。

「私は走った」「叫んだ」と声を発するたびに、舞台の床を力強く踏みつけ、パワーあふれる話だった。

終了後、姫路から東京経由で長野に帰るていさんを姫路駅まで送る役を引き受けた。

車の中で夫の新田次郎さんの『強力伝』、『孤高の人』などが愛読書と伝えると、ていさんは講演会と打って変わって穏やかな表情で感謝の言葉を述べた。

「富士山に観測所を設立した野中到、千代子夫妻を描いたご主人の『芙蓉の人』の千代子の記述は、ていさんを描いた箇所もあるのでは」と尋ねると、ていさんは「そういうことがあったかもしれませんね」と答えた。

ご冥福をお祈りします。

〔花時計〕2016年11月

\* 当時、藤原ていさんの夫の新田次郎の山岳小説をほとんど読んでいた。そのため、講演会終了後、姫路から東京経由で長野に帰るていさんを姫路駅まで送った。

## オルゴール

妻との中欧旅行前に、息子がやっと授かった赤ん坊のみやげに「オルゴールかCDが欲しい」と言ってきた。

チエコのみやげ物店で棚のオルゴールを順に手に取ってスイッチを入れて、曲を聴き比べる。どれがよいか決めかねていた。旅の初めのドイツでも品定めをしたが、結局決められなかった。そんな時、曲に合わせたハミングが聞こえてきた。

思わず振り向くと、声の主は東南アジアの若い旅行客だった。彼は私たちに笑顔を返して、楽しそうにハミングを続けた。「聞き覚えのあるこの曲がいいな。回転木馬のデザインもかわいいし」。妻も同意した。

帰国後、息子が「これは『天空の城ラピュタ』の主題歌で、日本人が作詞、作曲した曲だ」と教えてくれた。

〔花時計〕2016年12月

## スポーツ吹き矢

テニス、ゴルフは長続きせず、唯一続いているのはウォーキングだけ。そんな私に勧められたのがスポーツ吹き矢。

手取り足取りの教えを求めて参加すると、いきなり5人ずつ4チームの対抗戦メンバーとし



て最初に矢を放つことに。  
6 兎先の的に狙いを定めて、矢を入れた筒に息を吹きこむ。だが矢は的の手前で力なく落ちた。

「フッと一気に吹くんや」と声がかかる。次の矢は的の端に刺さった。気分がスカッとした。「いけるで」の声に口元がゆるむ。

第4矢は的の中心部分に当たった。1ラウンドで5回吹いて、得点は35点満点の15点。第2ラウンドは第1ラウンドを5点上回った。

呼吸を整え平常心で的に向かい、集中力を高めるために吹き矢を続けたい。

〔花時計〕 2017年3月

\* かつての職場のOB・OG会が行う健康教室のスポーツ吹き矢に初参加した。

呼吸を整えて的に向かいまず一礼。足を肩幅に開き、45度の角度で構え、矢を筒に入れる。両腕で筒を高く上げながら息を吸い込む。筒を下げながら息を吐き切る。6 兎先の的を見て息を吸いながら筒を的に向ける。一気に吹く。

私を含めて男女20人が4チームを編成。得点は的の円形中央部が7点、その外周部が5点、その外が3点で、5本が中央部に刺さると35点。

筒を的の中心に向けたのでは矢は中心に当たらない。重力の影響で矢は放物線を描いて落下するので、下の方に当たってしまう。

筒をどの程度上向きにすればよいのかはまだまだわからない。

## 挨拶が一番

人間関係をよくするコツは、挨拶が一番。相手が目をあわせてくれれば自然と話はずむ。

〔民生委員・児童委員って、どんな人〕 2017年3月

\* 2013年12月から民生委員・児童委員に就任している。

須磨区内の民生委員・児童委員は、23地区、263人。

地域で暮らす高齢者の安否確認や見守り、子育てで頑張っている皆さんの悩み事や困り事の相談・支援などを行うほか、行政や専門機関等へのつなぎ役を果たしている。

そこで、須磨区社会福祉協議会は、2016年度に「民生委員・児童委員のリアルな姿を知ってほしい」との願いを込めて「民生委員・児童委員って、どんな人？」アンケートを行い、生の声を集めたパンフレットを作成した。

## 花火

5月下旬、開け放ったわが家の窓外から突然に「ドーン」という地響きのような音。その瞬間、「雷？」と不安げな妻と顔を見合わせた。

数秒して再び「ドーン」。

ようやく隣駅の球場で打ち上げられる花火と分かり、一安心した。子どもたちが小、中学生だったころ、この音がするや裸足で専用庭に飛び出して、西空に打ち上げられる花火を見上げていた。妻がそのたびに「ベランダにスリッパがあるでしょう」と注意していた。

今は妻と2人暮らし。球場の方角の手前に高層住宅が建ったので花火は見えなくなった。この時期、この音がすればすぐに花火だと気づけばいいはずなのに今年も身構えてしまった。

〔花時計〕 2017年6月

\* 自宅は名谷駅を東へ数分の集合住宅である。

名谷駅の一駅西の総合運動公園駅前南にある野球場「ほっともつとフィールド」では、5回裏終了時に花火が打ち上げられる。

25年くらい前まで西の上空に打ち上げられる花火を子どもらと見上げて楽しんでいった。

## 「幼稚園に入れば」

かつての勤務先の退職者会主催の須磨歴史探訪ウォークでのこと。

9月のウォークで出身地が話題になり、「岡山県境に近い幼稚園もない田舎育ち」と話した。11月のウォークで歩き始めてすぐに、神戸出身の先輩が笑顔で話しかけてきた。

「君が『幼稚園に行っていない』と言っていたので考えてみた。幼稚園に入れば良いのだ。戦時中に卒業式ができず、後年に卒業証書もらった人がいるんだから、君もそのようになったらいいやろ」と。

奇想天外のこの話には乗らねばと思い「いい考えや」と応じた。

「君が卒園式で『二年生になったら』を歌っている姿も想像してみた」と言うので、「幼稚園児と歌や遊戯をするのは楽しいで」と返した。

まわりの会員が笑い転げ、その場が一気になごんだ。

(2017年9月)

## お手本

心療内科医の海原純子さんの「新・心のサプリ」の「お手本」(毎日新聞2017年10月1日)を読んで、子どものころのモヤモヤが解けた。

小学3年生から6年生まで通っていた書道教室では、先生の手本を下に敷き、その上に半紙を置いて筆でなぞって書き、1枚書き上げること先生に見てもらおう。先生は眼前で黙って朱色の墨で直す。

他の教室では手本を横に置いて書いていたようなので、なぞって書くやり方に少し疑問を持っていた。

元女学校教員で威厳があつて口数の少ない高齢の先生に、引っ込み思案な私はその疑問をぶつける勇気がなかった。

今改めて先生に尋ねてみたい。先生、初心者はまずは字をきれいに整えることに努め、その上で字の元気さと勢いを学べばよいと考えたのですね？

(2017年10月)

\* 父母に勧められ近所の子といっしょに書道教室に通った。

和風建築の玄関から教室のある2階に上がる。階段下に立つと家にしみ込んだ墨の香がした。畳の大部屋の教室には横長机が4、5卓置いてあり、その前に座り墨をすって書いた。

1日に5枚以上書くことになっていて、1枚書くごとに先生に直してもらおう。その際、良い箇所はマルで囲んでくれるくらいで、先生がコメントすることはほとんどなかった。

5、6年生になってからは、私の作品が『正筆会会報』にたまに掲載された。

その時だけは手招きして、笑みを浮かべて指を指して「ここに載っている」と教えてくれた。

## ヒガンバナ

わが家の専用庭は今年の酷暑と台風、豪雨で2週間ほど除草ができなかった。

暑さが和らいだ日にやっと除草にかかり、隣の庭との境の作業は慎重に進めた。というのも境界の低い柵沿いに十数年前からヒガンバナが咲くからだ。

その直後に蕾がふくらみ、3、4日後には10輪以上が咲いた。

深紅の花を目にしたときは、こんなところになぜ咲いたのかと驚いた。

なぞはすぐに解けた。

専用庭の土壌が悪いからと、妻の実家の農地の土を庭に入れた際に球根がくっついてきたらしい。それから毎年咲き続けている。子どもころ、親からヒガンバナには茎に毒があつて不吉な花と教えられた。

今は季節の移ろいを知らせるこの花の開花を待っている。

(2017年10月)

\* 分譲共同住宅のわが家には、南のベランダ前に40平方メートルほどの専用庭がある。

その盛り土が花や木の成長に適さない土壌なので、妻の実家から土を運んで庭に入れた。

以来、秋分の日が近づくと咲き始める。田圃の畦道に群生しているのに比べるとずいぶん少ないのだが。

## オーロラ

「オーロラが見られなくて残念でした。氷河や滝、間欠泉、地熱利用の大温泉で満足しましよーう」。帰国前のアイスランド空港でツアー仲間と話していると、そのうちの新婚夫婦が「肉眼では見えなかったのですが、僕のカメラに写っていたんです。」と言うではないか。一眼レフのカ

メラを覗き込むと、確かに横に帯状に伸びるオーロラが写っていた。後日、その写真をメールで送ってもらった。

「写真だけでも撮れて良かったです。皆様と共有できて嬉しい限りです。お二人のようにずっと旅行に行けるような素敵な夫婦になれるように頑張ります」。メールに添えてあった若い夫婦の言葉に思わず妻と顔を見合わせた。  
〔「花時計」2018年12月〕

\* 北極圏外で寒さもさほどでないアイスランドに妻と出かけた。夜の10時ごろから2時ごろまで北の夜空を見上げ、オーロラ・ハンティングバスでも出かけたが肉眼で見ることができなかった。

## 「エノケンみたいや」

公園の柵に足をひっかけ顔をコンクリート路面に打ち付けた。上唇部が傷つき眼鏡も壊れて、鼻の下の傷口の血の塊がちよび髭のようになった。

2度目の診察で外科医師が「腫れがひいてかさぶたも小さくなった」と説明して、「エノケン（喜劇役者・榎本健一）みたいや」と言う。これに「先生、自分ではチャップリンみたいやと思っ

ている」と応じた。  
同年齢の医師が「エノケンはチャップリンに憧れていたらしい」と教えてくれ、さらに「最近

は花菱アチャコ、浪花千栄子、秋田Aスケ・Bスケと言っても知らない人が増えてきた」と嘆

くので、「ようわかりますよ。懐かしい名前ですね」としばらく話が弾んだ。（2019年3月）

\* 友人に誘われて二月堂のお水取り見物に出かけた。  
「多くの方が訪れるので早めに行って見やすい場所を確保しよう」と、数時間前に到着したので、時間調整のため奈良公園を散策していてけがをした。膝も擦りむいたが、歯は折れなかった。

上唇部が傷つき口内を切って腫れあがったので、外出時はマスクをしていた。  
医師が医院の若いスタッフに昔の漫才師や女優の名前を言っても「知らない」と言うので話が合わないのである。

## 綿づくり

かつての勤務先の退職者会で前任世話役の先輩Tさんは私より数歳年上だ。母親が亡くなった今も毎週自宅の垂水と香川県の観音寺を行き来している。

近況を知らせる手紙に同封された新聞記事でそのわけを知った。

観音寺では丸亀京極藩が塩害に強い豊浜綿の栽培を奨励し、80数年前まで盛んに栽培していたが、終戦後まったく消えてしまった。

先輩の母は「栽培の火を消してはいかん」と土地を耕して綿づくりを続け、豊浜小学校の歴代4年生に綿の花を見せ綿摘みを体験させてきた。今は先輩が綿づくりを継いでいる。

綿づくりの継承と、町で子どもたちから声をかけられることが往來の理由だった。

〔花時計〕2019年4月

\* 退職者会の前任世話役の先輩は、母親が亡くなった以降も、週末は垂水の自宅で平日は香川県観音寺市でそれぞれ過ごす生活を続けている。

観音寺に家があり、地域の人とのつきあいのためと老人クラブに加入し、会長に就任をと頼まれたが、「それだけは勘弁して」と固辞して副会長に就いていることは教えてもらった。往來の理由が気になりつつ、それ以上に子細に尋ねるのいかがなものかと思ひ、わけを聞いていなかった。3か月ぶりの手紙に添えられた新聞記事などで、その理由が明らかになった。

## 『蒼氓』

4月22日の毎日新聞兵庫県版の記事で旧神戸移住センターが紹介された。

南米移住者は渡航前に同センターに数日間滞在して研修を受け、鯉川筋を下って移民船で神戸港を出港した。

ブラジル移住者が幾多の困難に立ち向かいつつ、新天地に根をおろそうと決意するまでを描いた作品が石川達三の小説『蒼氓』である。石川は移民船で渡伯して本作を執筆し、第1回芥川賞を受賞した。

40年ほど前に兵庫県を舞台とした小説を読み漁ったうちの1冊が『蒼氓』だ。希望と不安が入り混じった中で日本を離れる移住者は、鯉川筋の風景をどんな気持ちで眺めたのだろうかと思いをめぐらせた。

〔花時計〕2019年5月

\* 多くの移住者が離日前に滞在した当時の神戸の街並みや海外移住の歴史、移住先への道のりや暮らしを映像、写真で紹介する「海外移住と文化の交流センター」は、数回訪ねた。

兵庫県を舞台にした新田次郎『孤高の人』、井上靖『三ノ宮炎上』、野坂昭如『火垂るの墓』、田宮虎彦『明石大門』、円地文子『千姫春秋記』、志賀直哉『城の崎にて』、司馬遼太郎『播磨灘物語』、海音寺潮五郎『列藩騒動録・下（仙石騒動）』、高橋和巳『散華』などを読んだ。

## 「力いっぱい生き抜く」

かつての勤務先OB・OG会は総会で米寿会員にお祝いを贈っている。

懇親会で白いスーツをおしゃれに着こなして代表挨拶に立った先輩は、「力いっぱい生き抜こうと思っている」と力強く述べた。この挨拶には会場内のあちこちから「おおー」と感嘆の声があがった。

開会前に「おめでとうございます」と声をかけると、握手を求め力強く握り返したので、私

の手が痛くなるほどだった。  
 かつて空手をしていてこの先輩の言葉は「若い君らはまだまだこれからや」と、皆を励ましたように思えた。  
 (2019年5月)

\* かつての勤務先の退職者会の世話役をしている。  
 挨拶に立った先輩は顔を知っている程度だったのだが、白いスーツをおしゃれに着こなして、とても米寿を迎える人とは思えなかった。  
 米寿代表として乾杯の発声挨拶は、自分はまだまだやるぞという決意がみなぎっていた。

## 庭の手入れ

「庭付き住宅を買ったのに、あなたはお父さんのように庭の世話をしないね」。

専用庭に降りるのが年に数回の私に妻はあきらめ顔だった。

それが、リタイア後に小学校での花づくりボランティア活動を機に、もっぱら除草だが庭の手入れを始めた。

以来、春先から初夏にかけて新緑を増す柿の若葉、真っ白な鉄砲百合ゆり、藍色の紫陽花あじさい、薄紫色のアガパンサスと続く庭の彩りの変化や時々訪れる野鳥のさえずりを楽しんでいる。

商売一筋だった亡父は、65歳ごろに高齢者大学で盆栽を学んでからは、それまで庭師に頼ん

でいた庭木の剪定せんていや盆栽の手入れを始めた。

「お前のやっているのは庭いじり」と父は笑っているだろう。

(「花時計」2019年8月)

\* 約40年前の入居時に父が専用庭に松や榎等の苗を植えてくれたが、十数年後に枯らしてしまった。

庭の手入れは、柿の木、百合、紫陽花、ヒガンバナの苗を植えるなどをほとんど妻が行い、リタイア前の私は気が向いたら除草を手伝うだけだった。

## 先輩からのメール

退職者会の先輩から、コロナ禍後初めてのメールが届いた。

「昨年4月、毎日新聞に掲載された君の投稿を見た香川県観音寺市の小学校の先生が、4年生に読み聞かせた。子どもたちが感動したことを先生も喜んでいいる。君に感謝し報告する」と書かれていた。

投稿は、先輩が垂水区の自宅と観音寺市とを往来するわけは、亡き母親の跡を継いで綿づくりを続け、小学生に綿の花を見せ、綿摘みを体験させるためというものだった。

早速に「お母様と先輩の取組みを小学生がしっかりと受け止めた証しで、私も小躍りしたいほど嬉しい」と返信した。  
 (2020年7月)

## あるある

ツアーを終えて帰国の朝の現地空港でのこと。お世話いただいたJ社添乗員が「関空は流れ解散になりますので、ここでご挨拶させていただきます。お疲れさまでした。皆さまのご協力のおかげで無事に今日を迎えました」と謝辞。その最後の言葉が「今後ともT社をよろしくお願ひします」。参加者はその瞬間あつけにとられた。

すぐに気づいた添乗員は「ああ、ボケをやってしまった」。

これには全員が大爆笑。気配りが行き届き、親切丁寧な彼女の仕事ぶりはみんな知っていたから、「気にしない。だれにもあることやから」と慰めたが、彼女は「何で言うてしもたんやろ」と、その落ち込みぶりは気の毒なほどだった。

（「かわら版」2020年5月号）

\* 今はJ社勤務だが、かつてT社に勤務していた。「言っではいけない、言っではいけない」と思っていると、ついその言葉が口について出てくることってありますね。

## 信州リンゴ

大阪府下に住む妹の夫から信州リンゴが届いた。

箱には「Y様が被災地にボランティアに来てくださったことがきっかけで、信州リンゴをお

届けするご縁をいただきました。ビタミンを摂取しながら元気に冬を乗り越えてください」との手紙が添えられていた。

歳暮には早いと思ひ妹に尋ねると、「昨年秋の台風による記録的な豪雨で大きな被害を受けたリンゴの名産地に、10月と12月にボランティア活動に出かけた。しかし、今年はコロナ禍で活動できないので、その代わりにリンゴを食べている」と返事があった。

支援に行けないのでリンゴを食べて応援する彼の気持ちを汲み取り、生産農家の方に「おいしいリンゴですね」とメールを送った。

（2020年11月）

\* 自営業を営む義弟は、昨年ボランティア活動に出かけたリンゴ農園からリンゴを購入入して宅配してくれた。

妹のメールで彼がボランティア活動をやっていたことを初めて知った。妹がメールに「自己満足?」と書いていたので、「思っでも行動するのはなかなか出来ないことやで。励まさない」と返した。

## O先輩へ

「俺は、君が『社会人になって最初の上司はOさん』と言って恥ずかしくない上司でありたい。仕事は俺のやり方を見て自分で考えてやれ。手取り足取りで教えない」。会うなりいただいた15歳年上の先輩の厳しい言葉は今も忘れません。

計画づくり、折衝などで従来のやり方にとられない新しいスタイルで仕事を進める先輩の期待に応えようと、もがきながら背中を追い続ける日々でした。

2年半後にはお互いに勤務先が変わり、私が東京勤務となって間もなくのことでした。「東京駅まで来てくれ。渡したいものがある」との電話に、出向くと励ましの言葉に添えて、「妻から預かってきた」と紙箱を差し出されました。それは、手作りのロールケーキ。慣れない東京暮らしを始めたばかりで、甘いものに目がない私への何よりのプレゼントでした。退職時には「これからは嫁さんを大切にしろよ」の手紙を添えて、職場にお祝いの品が届けられました。

かつての勤務先のOB・OG会は、毎年の総会時に米寿を迎える会員にお祝いを贈ります。数年来この会の幹事を務めていた私は、米寿を迎えたOさんに会ってお世話できることを楽しみにしていました。しかし、欠席の返事だったので電話を入れました。すると、奥様からの言葉は「あなたには連絡しようかと躊躇してました。実は主人は脳梗塞で倒れて施設に入っており、今は私のことがかるうじてわかる状態なんです」との、思ってもいないものでした。

野球が得意でサイクリングを趣味とするスポーツマンの先輩だっただけに、にわかには信じられませんでした。かける言葉が浮かばず、「お世話は大変でしょうが」と言うのが精いっぱいでした。先輩がリタイア後、地域活動に勤しんでおられたことを奥様から伺いました。私も先輩を見習って地域活動の毎日です。私は今、胸を張って言えます。「社会人になって最初の上司はOさんです」と。

〔出せなかった手紙〕〔私のまいにち〕2021年2月号

## 資料

### I 花谷ふれまち協議会の歩み

### II 花谷地域の基礎データ（神戸市ホームページ掲載）